

首里城扁額製作検討委員会（第2回）議事要旨

日時：2021年12月21日（火）14:00～17:00

参加：沖縄県市町村自治会館 2階 大会議室

1. 新たな知見による扁額仕様の整理

- ①額縁の七宝繫文は沈金ではなく、線彫りを行い雲龍文と同じく金箔を貼ったと考えられる。
- ②中国皇帝関係の龍文には規制があり、中心に正面向きの龍が1頭、爪が5本で、すべて阿形である。それを念頭に扁額事例も参考にしながら、額縁文様を検討する必要がある。
- ③尚家文書に、高さが9寸の“雑大箱”というのがあり、それに扁額が収まることを条件に、“向龍（正面向きの龍）”の取り付け方を検討すること。
- ④尚家文書に、扁額の受け台と考えられる“御額持”というのがあり、再現する方法をワーキングで検討すること。
- ⑤青塗りの検討にあたって、琉球の漆塗りで、石黄に藍を加えて緑色をつくるという実証例があるので、参考にするとよい。
- ⑥刻苧詰めと布着せに用いる接着漆は同じ調合とし、麦漆と糊漆を混ぜて瓦地の粉を入れる仕様とすること。
- ⑦扁額文字が陽刻か陰刻かについては、どちらもあり得るが、中国の扁額事例の情報を集めて検討する必要がある。
- ⑧扁額「致和」の漆塗装についてきちんと確認しておきたいので、あらためて熟覧する機会を設けることとする。
- ⑨正殿扁額の図面案にある吸付棧の断面寸法4cm角については、地板の厚さ3cmの1.5倍以上は必要なので、4.5cm以上となるよう修正すること。
- ⑩沖縄県工芸振興センターで、瓦地の粉の問題・課題について詳細に検討しているので、その成果を活用するのが望ましい。
- ⑪尚家文書にある“青へり、赤へり、黒へり・・・”の具体化の方法について、もう少し検討する必要がある。

2. 文字・落款の製作の考え方、製作の方向性

- ①文字・落款については、原書から木工、髹漆、加飾に進める際、書家の方々に立ち会って助言や確認をいただく作業は必要である。
- ②扁額「致和」の年号など、かなりシャープな線で施されていた。正殿扁額でも製作技法を検討する必要がある。

3. 木材在庫調査の状況

- ①木材については、専門家により材質を確認し、狂いや癖のない木材を選ぶ必要がある。産地よりも木の質を優先すべきで、県内外の産地は問わず検討してよい。県産材と県外産材を組み合わせるのは、後々、問題が出かねないので、あえて組み合わせるということは考えなくてよい。
- ②木かすがいは、地板と同じ樹種でよいと考えられる。

- ③木材在庫調査にあるイヌマキは径が小さく狂いやすい。額縁の土台については、イヌマキを使うと振じれて龍彫刻が崩れる恐れがあるため、ヒノキ材を使うというのも考えてはどうか。
- ④木材の選定は今年度で先行決定し、材料を確保しなければ間に合わない。ヒノキ材は問題ないが、イヌマキ材をどうするか。次年度すぐに木材を入手し乾燥させることが必要である。

4. 製作体制、製作工程の検討

- ①扁額の製作にあたって、新たな知見に基づいて高い技術も求められるため、体制の強化と、試作による継続検討が必要となっている。
- ②額縁彫刻については、透かし彫りか浮彫りかの2つが考えられるが、どちらにするかで彫刻専門家の意見やスケジュールも変わってくる。立体彫刻の下絵をどう作成するか、ワーキングで検討していく必要がある。
- ③額縁彫刻について、透かし彫りか浮彫りか、中国様式に従ったのか琉球風にアレンジしたのか、ワーキングで議論を進めること。
- ④正殿完成に間に合わせるため、「中山世土」は浮彫りにし、残りは透かし彫りにするという方法もある。3枚の扁額は個性があり、まったく同じ仕様で作る必要はないと考えられる。
- ⑤尚家文書には、額縁の透かし彫りは非常に難しいとの記載があるが、だからといって透かし彫りをやめるというわけではない。
- ⑥“向龍”が大きな材であるのに対し、額縁の彫刻がただの浮彫りというのは考えにくい。
- ⑦額縁彫刻の幅 19.7 cm、厚さ 6 cmというのは、事例を参考に、もう少し検討の余地があると考えられる。